2023年度　学校評価書

学校名：　末広学園（静岡型小中一貫教育施設分離型末広中学校区グループ）
【静岡市立新通小学校】

A：大変良い　B：まあまあ良い　C：あまり良くない　D：全然良くない

静岡型小中一貫教育における特色ある教育活動

大項目	中項目	グループ校の評価指標	自己評価	学校関係者評価委員会から（小中一貫教育準備委員会等）	改善策（来年度の目標設定,具体的な取組目標）
【視点1】 学校の教育目標を グループ校で共有する	学校教育目標「自立　共生　（たくましい心 豊かな心）」を共有し、「幸せ」を実現する子どもを育成する。	①（指標15）※「将来の夢や目標を持っている」児童生徒の割合 （学校説明） 小学校77.9%、中学校56.5%が「将来の夢や目標を持っている」と回答した。全国と比較すると小学校では約3ポイント、中学校では約10ポイント下回っているが、小学校においては改善傾向にある。子ども自身が夢や目標に向けた「なりたい自分」に近づくために、探究的な学び(調べ学習・体験学習等)を重視して取り組んできた成果と言える。	C	小中学校ともに校則見直し委員会の場で活発な議論がなされたり、総合的な学習では地域から学び地域と連携した「静岡街づくり発表会」等意図的に地域の人との出会いの場を設定したりして、児童生徒が将来を自分事として捉えていることは評価できる。将来の夢や目標を大切にした教育活動への取組は今後も期待できる。 ９年間の系統性・連続性を意識した授業として、小中合同の公開授業や小小・小中の意見交換の場の設定等の実践がなされている。ズームやクラスルームの活用、スプレッドシートを使った公開授業等により、授業内容の統一や交流授業の推進を図った実践は、大いに評価できる。 英語教育の連携においては「グループ校の評価指標」の見直しが図られ、より児童生徒の実態に寄り添った評価指標となったことを大いに評価したい。ALTやGETに積極的に話しかけができる場の設定や、休み時間等日常的に英会話を友達同志でも気楽に話している場面等を賞揚する等の手立ても、英語を身近に感じ積極的に英語の楽しさを味わう児童生徒がさらに増えると期待したい。 末広学園グループ校相互の連携は、非常によくとれていると評価したい。特にICT（ズームやクラスルーム等）活用による授業内容に関する情報交換や意見の調整を行い成果を上げている。小学校での学び方や生活規律、家庭学習等についての話し合いは、授業の改善や統一性につながるものと評価したい。 ３小学校交流活動では、子どもたちが主体性を持ち、児童による企画運営がなされていたことは大いに評価したい。例えば、グループ分けをし、グループ内で会話をしないと答えが出ないようなお題でコミュニケーションの活性化を促したり、グループ替えを何回も行い多くの人との出会いや関わりが持てたりするように工夫がされていた。このような交流活動は小小の横の連携の強化となり、中1ギャップ解消の一助となると確信した。 地域の行事への参加については、コロナが5類へ移行したとはいえまだまだ積極的な参加を望める実態ではない中で、中学生の全国平均を上回る結果は今後にも期待したい。末広中１年生総合学習の「末広地区の自慢―スペシャリスト編―」は、「学区に自慢できるものがある」「もっと地域について知りたい」との思いを深める機会になったと確信する。学区の運動会や夏祭り等でのボランティア活動、安倍川花火大会の片づけボランティア活動も年々盛んになっていることを大いに評価したい。 令和2年度に教員の働き方改革が始まったが、にも関わらず時間外勤務の改善がなかなか見られない。教員の多忙・疲弊を減らすには、スクールサポートスタッフ等の時間増や増員が必要と強く感じる。これらの取組に対して市教育委員会の取組に期待するところである。 「働き方改革」については、意識していない職員がいるとは考えにくい。これまでの学校行事と比較して、かなりの精選が図られている。個々の業務負担感には個人差があり、多忙化を解消するために「末広学園らしさ」を失ってほしくないと考える。	児童生徒に将来の夢や目標を問いかけると、なりたい職業をイメージする児童生徒が多い。それは、現在行っているキャリア教育が進学や職業観の内容に偏っているためであると考えられる。なりたい自分イコール将来の職業だけでなく、自分のあり方、生き方について考え、実現に向けて取り組む児童生徒を育成していくために、児童生徒をどう支えていくか考えていきたい。
【視点2】 ９年間の系統性、連続性 を強化した教育課程を 編成・実施する	「教科年間計画・心を育む道徳教育計画」の作成と実践 ・9年間を見通した年間計画の作成と実践 ・つけたい力がつく教材の選定 ・育成したい力を明確にした道徳教育の推進	②（指標22）　つながりのある系統的な指導を重視した授業改善を行っている教職員の割合 （学校説明）令和4年度（79.3%）と比較して、9%下回り、70.1%となった。昨年同様、学習指導案を作成する際、系統性について記述をしたり、9年間のつながりを重視した年間計画を作成したりと、系統性を意識した授業づくりを多くの教員が実践してきたが、日々の授業に追われ十分に系統性を意識して授業実践を行えなかった若手教員もいた。来年度は小学校で新教科書が使用されるので、9年間を見通した年間計画の見直しやつけたい力を明確にするなど授業改善を組織で取り組んでいく。	B		経験年数の少ない若手教員の中に日々の授業に追われ十分に系統性を意識して授業実践を行えなかったと感じている教員もいるため、各単元に入る前に単元構想を意識できるよう指導していく。また、来年度は小学校で新教科書が使用されるため、9年間の見通しやつけたい力を明確にするなど、授業改善を組織で行っていきたい。
	英語教育の連携 ・中学校英語教諭による「外国語科」授業実践 ・中学校英語教諭による小学校外国語科の授業参観 ・地元ボランティアによる英語・外国語授業サポート（GET）	③（独自）ALTやGETに対して、積極的に話しかけることができる児童生徒の割合 （学校説明）68.5%の児童生徒がALTやGETに対して、進んで（積極的に）話しかけることができると回答しており、英語教育推進の手立てが、概ね有効であったと言える。また、ALTやGETに進んで話しかけ、外国語の授業を楽しんでいる児童生徒も見られる。肯定的な回答をした児童生徒は、ALTやGETと発表の練習やコミュニケーションを取ったほうが自分のスキルアップにつながり、外国語の能力が高まると考えている。「自分の夢のために英語を覚えたい。」と将来を見据えた回答もあった。反対に否定的な回答をした児童生徒は、英語が苦手でどのように話しかければよいのかや言葉が通じるかを不安視している。	B		英語への苦手意識がある児童生徒が否定的な回答をしている傾向にある。ALTやGETにどのように話しかければよいかや言葉が通じるだろうかという不安が影響している。今後も、英語に苦手意識を持つ児童生徒が、ALTやGETに話しかけることができるような環境作りを継続して構築し、少しずつ自信をつけ、話しかけることができるようにしていきたい。
【視点3】 教職員の協働、児童 生徒の交流	職員研修・交流 ・互いの公開授業参観を教育計画化 ・年間3回（夏期・秋期・冬期）全体研修設定 ・毎月の「小中一貫の日」の活用 ・スタートカリキュラムによる幼・小連携	④（指標23）※「学年や校種の枠を越えて、連携を図っている」教職員の割合 （学校説明）令和4年度（75.9%）と比較して、1ポイント上回り、76.8%だった。小学56年生の交流会や中学校見学などを年間計画に入れたり、クラスルームを活用して授業の様子や作品を紹介しあったりと、昨年度からの交流を継続して実施した。また、クロムブックを活用して小中間で公開授業参観計画したり、年5回の末広学園の日では各部局で小小・小中間で意見交換を行った。	B		Chromebookを活用しての小小の連携、特に同学年での情報交換や図工の作品交流はだいぶ定着してきた。来年度は、目的を明確にして内容を精選し、連携の質を向上させたい。また、今年度より始まった公開授業参観については、自校以外の授業を参観できるように早めに計画を立てるなど整備し、特に小中間で授業を通して子供の姿を見るようにしていきたい。
	児童生徒の交流 ・小学5、6年生の中学校見学・体験の計画・実施 ・3小学校の合同活動の計画・実践 ・各教員のアイディアによる交流活動 ・あいさつ運動	⑤（独自）各活動実施後、「満足している」（よかった）という児童生徒の割合（各活動実施後、形成的に評価） （学校説明）各種活動後、「満足している（よかった）」という児童生徒の割合は6年児童の95%、5年児童の97%が肯定的な回答をしており、令和4年度よりも肯定的な回答した児童が増えていた。三校交流を実施し時間や仕方を工夫したり、児童による企画・運営等により児童主体の活動になったりと活動を改善した成果が見られた。また、中学生にとっても部活動体験は上級生としての意識を持つ機会となり、これらの交流が中1ギャップ解消につながると期待できる。	A		今年度は、5.6年生の交流活動を宿泊活動等の中に組み込むのではなく、中学校の授業見学や部活体験の前段として行い時間を確保したこと、活動計画を子供たち自身が考え、やり方をズームで事前に配信するなど、子供主体で実施したことが満足感の高まりにつながった。来年度も中一ギャップ解消につながる活動を継続実施していきたい。
【視点4】 地域との連携	地域活動への参加及び連携 ・地域行事への積極的参加と学校の連携 ・児童会、生徒会組織による地域活動の計画・実践 ・地域防災の日への参加及び活用 ・コミュニティ・スクール支援部会との協働	⑥（指標25）※「今住んでいる地域の行事に参加している」児童生徒の割合 （学校説明） 小学校では55.0%、中学校50.7%の児童生徒が「今住んでいる地域の行事に参加している」と回答した。全国と比較すると、小学校では約3ポイント下回り、中学校では約12ポイント上回っていた。祭りなどへの家庭参加の増加や伝統行事の学習により地域行事への関心が高まったと言える。	B		今年度は祭りなどの地域行事への参加が再開し、各校で様々なイベントが計画された。特に中学校では浅間神社や安倍川花火大会の清掃などに積極的に参加する姿が見られた。小学校では地域行事への参加は、家庭単位の参加によることが多いため、保護者の参加意識に影響を受ける。保護者も巻き込みながらの啓発的な働きかけを行っていきたい。
学校環境	教師の業務改善 ・教育課程編成における行事や会議の精選 ・各活動実施後の振り返りを生かしたPDCAサイクル ・定時退庁日の設定等による長時間勤務の是正	⑦（独自）業務改善（働き方改革）を意識して勤務している教職員の割合 （学校説明）令和4年度（81%）と比較して、15ポイント下回り、66%となった。末広学園の会議をリモートで行い、公開授業などの実施につなげたり、ICT活用力を高めるための研修を行ったりと、業務改善に取り組んだ。ICTによる業務改善は遂行できているが、個々が抱える業務負担感を軽減したり、多忙化を解消したりするなどの改善は十分でなかったと言える。	B		コロナ前の行事や活動が徐々に再開していく中、行事の見直しや個々の仕事をタスク化するなど、勤務時間を有効に活用できるように意識改革を行っていきたい。また、会議や研修については目的を明確にし、検討事項や会議時間の設定を見直したり、校務の偏りをなくすために複数の職員で分掌データを管理作成できるように工夫したりと、組織として改善を図りたい。

グループ校の軸となる取組・活動	グループ校の評価指標	自己評価	学校関係者評価委員会から	改善策（来年度の目標設定,具体的な取組目標）
A　特別支援教育の推進　　担当：1局（1）（4）部・2局（1）部 ①個別の支援計画、相談活動等に基づく個に応じた支援の充実 ②生徒指導・支援に関わる小中接続の円滑化 ③UD授業、環境の推進	⑧（独自）児童生徒1人1人の特性に応じて適切な指導の具体化・改善を図っている教職員の割合 （学校説明）「そう思う・だいたいそう思う」と肯定的な回答を示した教職員の割合は92.8%となった。「個別最適な学び」を意識した取り組みや「個別の教育支援計画」による家庭と学校との連携を継続してきたことなど、さまざまな立場の目で生徒理解を図ってきた成果と言える。今年度、新たに設定した評価指標だが、児童生徒一人一人を大切する意識は、末広学園がめざす「自立・共生」に向けての基本姿勢であるため、今後も全職員で意識して取り組んでいく。	A	本年度新たな評価指標を掲げて取り組まれた「児童生徒1人1人の特性に応じて適切な指導の具体化・改善を図る教職員」については、「個別最適な学び」を意識して取り組んでくださったことに感謝したい。不安がある小6保護者に対して、中学校教員による教育相談ができる場を設定したり、児童生徒には別室学習室の活用等で居場所を設けたりして、一人一人を意識した取組や個に配慮した教育活動がなされていたことは大いに評価できる。 指標14についても新たな指標「自分には、よいところがあると思う」児童生徒の割合で取り組まれ、12月の結果が小中で変化があったことについて考えたい。この変化はそれぞれの成長の表れと言ってもよいのではないかと考える。「今の自分」について真剣に分析し、より高いものを小学生は求め、自分もやればできることを感じた中学生が増えた結果と捉えたい。グループ校の自己評価はCであるが、十分にA に値すると考え今後に期待したい。 小中学生の地域行事への参加や地域住民の学校行事・ボランティア行事への参加は積極的に行われている。小学校での地域学習に始まり中学校では、1年から「静岡の魅力再発見」、商品やサービスを共同開発する「エンジン」、集大成として「将来の静岡について中学生の視点で提案する『静岡街づくり』」では大変興味深い提案がなされた。小学校での「時場礼」の行動規範、「学校の生い立ち」やお茶を中心にした「地域産業の掲示コーナー」等、教育活動の中に地域や社会とつながる活動が学校ごとに工夫されており、大いに評価できる。 今年度は、ICT機器を活用する等の工夫をした授業を多数参観させていただいた。社会科「株のしくみ」は、ICT機器の良さを生かした授業で大変興味がわく時間であった。中1の英語の授業で、自由に席を離れて会話をしている姿も見られ、今後の成長が楽しみになった。また、板書、手作り教具の併用等本時に合った授業進行に努められており評価したい。	今後も「個別最適な学び」を実現できるよう教室のUD化やICTの活用、授業における課題の設定などを工夫、実践していく。また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、医療機関など各機関との連携を図り、情報を共有することで、一人一人の児童生徒にとって安心・安全な居場所づくりに取り組んでいきたい。
B　心を耕す学習の充実　　担当：1局（2）・2局（1）（3）部 ①人権や多様性に関わる道徳等の授業の充実 ②対話を通じて学びを広め、深める授業づくり ③心と体を育む読書・健康保健指導	⑨（指標14）※「自分には、よいところがあると思う」児童生徒の割合 （学校説明） 小学校で80.0%、中学校では79.3%の児童生徒が「自分にはよいところがあると思う」と回答した。全国と比較すると小学校では3.5ポイント、中学校では0.7ポイント下回っているが、全児童生徒の約80%が自分の良さや可能性を認識している。今年度新たに設定した指標のため、今後もさまざまな取り組みを継続していく。	C		4月と比較すると、12月の調査結果から、小学生は肯定的な回答の割合が下がり、中学校では上がるという変化があった。その要因が、調査する時期や成長段階によるものなのか、児童生徒の自己肯定感を高める教師側の取り組み方によるものなのかなど、分析方法を検討していきたい。
C　地域協働学習・活動　　担当：2局（1）（2）部 ①地域から学び、地域に発信する探究的な総合的な学習 ②地域学校協働活動の積極的な推進 ③地域と連携した主体的な特別活動	⑩（独自）※地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある児童生徒の割合 （学校説明） 小中学校ともに約72.0%の児童生徒が「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」と回答した。全国と比較すると、小学校では4.8ポイント下回り、中学校では8.2ポイント上回っていた。総合や学活など小中9年間を通して積み上げてきた地域学習が、地域参画や地域貢献の意識につながっていると考えられる。	B		各地域行事への参加は昨年度と比べ、積極的に行われるようになった。また、社会科や総合的な学習における地域学習が、地域参画や地域貢献への意識を高める機会となっていると考えられる。今後も地域行事への参加を促すとともに、地域の人材や魅力を学習と結びつけ、児童生徒が地域や社会について考える活動を教員が丁寧に価値付けしていきたい。
D　ICTの推進　　担当：1局（3）（5）部・2局（1）（2）（3）部 ①ICT教育年間計画に従った活動の実施 ②児童生徒が自ら学習用端末を有効活用するための手立ての工夫 ③小小、小中、学校外との接続を通じた交流・連携の促進	⑪（指標4）※「ICT機器を活用するなど工夫して授業をしている」教員の割合 （学校説明）令和4年度（86.6%）と比較して、1ポイント下回り、85.7%となった。つけたい力を身につけるための手段として、積極的にICTを活用し効果的な授業実践につなげることができた。児童生徒は、動画を撮影して客観的に自分の活動を見て課題を見つけたり、ソフトを使って新出用語をドリル的に学び知識の定着に活用したりと、工夫して授業を行えた。	A		多くの教員がICT機器を活用した授業実践に取り組んでいる。さらに今後は、ICT活用を児童生徒の個別最適な学びや協働的な学びをにつながるように、校内研修の充実を図りたい。どのような力を身につけさせたいのかを明確にし、教師がICTをどのように活用すればよいかを考えた授業を実践したい。

各学校の評価

大項目	中項目	各校の評価指標	自己評価	学校関係者評価委員会から	改善策（来年度の目標設定,具体的な取組目標）
重点目標 「気づく　考える　行動する」	各学校の「重点目標」の達成 ・3ステージ制とし、各ステージに具体的なテーマを設定する。 ①第1ステージ（4月～7月）…「つくる」（知）「挑戦する」（体） ②第2ステージ（8月～12月）…「高め合う」（行） ③第3ステージ（12月～3月）…「感謝する」（心）	⑫（独自）児童生徒に対して、折に触れて重点目標を意識させて指導を行っている教職員の割合 （学校説明）「そう思う」が42.9%、「だいたいそう思う」が50.0%と、約93%の教職員が学校の重点目標である「気づく　考える　行動する」を意識した指導を行っている。昨年度より授業場面や生活場面において、教師が先回りしたり全て指示したりするのではなく、子供に考えさせる場面や子供たちがどう動くか待ってみるという場面を意図的に設定するということを行ってきた。もちろん発達段階を考え、教えるべきところは教えた上で考える場面を設定し、本年度も継続している。今年度は特に「行動する」ことを意識した働きかけを行ってきた。	A	本項目については、末広学園全校が一丸となって取り組まれた結果の自己評価Aであると評価したい。新通小「気づく　考える　行動する」、安西小「自分からやり抜く子　ともに支え合う子」、番町小「夢やめあてに向かって挑戦する子」、末広中「課題を見つけ、解決しよう　他を思いやる心を大切にしよう　進んで活動しよう」の各校の重点目標設定により「自立　共生」の達成に邁進している結果であると考える。	重点目標は自校の教育活動の拠り所となるものである。すでに教職員だけでなく子供たちにも浸透してきた「気づく　考える　行動する」という重点目標が、委員会活動や総合的な学習の時間などで少しずつ表現することができるようになってきた。来年度も子供たちが気づき、考えたことを表現する場を設定し、価値づけをしていきたい。

静岡型小中一貫教育における共通となる教育活動（全国調査等の活用）

		学校関係者評価委員会から	改善策（来年度の目標設定,具体的な取組目標）
学力の状況 （全国学力・学習状況調査）	小学校	（学校説明）学力の状況（国語69点、算数64点）は、全国学力・学習状況調査において全国平均正答率（国語67.2点、算数62.5点）を上回っており、学力向上、授業改善に関する取組等により良好な状態にある。そのため、今後もこれまでの各校での取り組みを継続的に進めていく。学習指導要領の内容については、国語・算数共に全般的に概ね全国平均正答率を上回っている。国語では特に「言葉の特徴や使い方に関する事項」の内容について、算数では、「変化と関係」の内容において正答率が高くよくできている。問題の形式による正答率は、選択式や短答式の問題において正答率が高く、記述式の問題で正答率が低く課題がある。また、国語・算数共に「知識及び技能」で正答率が高く、「思考・判断・表現等」で正答率が低く課題がある。	国語・算数数学共に、また小中共に良好な学習状況であることからこれまでの各校の取組に感謝したい。全国学力・学習状況調査は、年度当初4月に実施されることによって、伸ばすか、身に付ける力、指導の見直し等多くの示唆を与えてくれる機会と捉えることができる。ICT化により関連付けて書いたり説明したりすることに苦手意識を持っているようだが、「できた！という達成感」を感じる授業改善に心がけていた抱ければ幸いである。更に、正答率の高かった内容については、より確実な力としていけるよう期待したい。	学力向上や授業改善に関する取組により小中とも良好な状態といえる。「できた」と実感できる授業をめざし、小学校では実体験や五感を大切にした学習を通して、学んだ知識を活用して最後まで粘り強く考えることができる授業を全教職員で意識していきたい。中学校では、既習事項や読み取った情報をもとに構成した自分の考えを記述したり、説明したりする表現活動を意識して授業に取り組んでいきたい。
	中学校	（学校説明）学力の状況(国語71点、数学52点、英語49点）は、全国平均正答率(国語69.8点、数学51点、英語45.6点）を上回っており、学力向上、授業改善に関する取組等により良好な状態にある。国語では、内容を読み取り、必要な情報を選択したり、短い語句で答えたりする基本的な力は定着しているが、情報の関係性や結びつきを理解し記述する力に課題がある。数学では、「数と式」の領域において用語を活用して簡潔に説明する力に課題があり、「図形」領域でも説明不足の回答が多く見られた。英語では、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」において聞き取ったり、読み取ったりした概要を書く力は定着しているが、正確に情報を理解し、まとまりのある英文で書くことに課題がある。また、「話すこと」においては、無回答率が全国平均よりもかなり低く、英語で話そうとする意欲が高いことがうかがえる。		
体力の状況 （新体力テスト、全国体力・運動能力、運動習慣調査）	小学校	（学校説明）全国平均と比較すると、男女ともに「ほとんど差がない」もしくは「高い」結果となった。体力の状況は改善傾向にある。特に、女子はほとんどの実技調査項目において平均点以上となり良好である。主に中学年で「走る」「投げる」を取り入れた運動を意図的に取り入れた成果と言える。各実技調査項目については、握力、反復横跳び、シャトルランで男女ともに平均点を超えた。男子で大きく平均点以下となった実技調査項目は、長座体前屈で、「柔軟性」に課題がある。	体力の状況としては全国平均と差がない結果であることから、引き続き指導をお願いしたい。小学校では、前年度の結果から中学年でボールを使った運動や持久力をつける運動に取り組んだ結果、体力面で改善されていることを評価したい。中学校でも前年度結果を受けとめ、取り組んだ結果、柔軟性が伸びていることを評価したい。小中学校ともに、全員同じ到達目標を設定するのではなく、個々に自分の到達目標を設定するのであれば、その目標にどのように向かっていくかに重点を置いて指導されていることを評価したい。	小中とも全国平均を上回る種目が多く、改善が見られた。特に、小学校では運動嫌いを作らず、体を動かす機会を増やしたことで改善につながり、中学校では個々の課題を生徒が意識し、自分の目標達成に向けて授業に取り組んだことが成果につながったと言えるので、来年度も個の目標をどのように達成に導くかを大切に実践していきたい。
	中学校	（（学校説明）男女ともに握力・上体起こし(腹筋)・長座体前屈(柔軟性)・反復横跳び(瞬発力)・立ち幅跳び（跳躍力）・ハンドボール投げ（投力）が全国平均を上回っている。一方、男子の20mシャトルラン(持久力)・50m走(走力）、女子の20mシャトルランは、全国平均をやや下回っている。昨年度と比べると、上体起こしが全国平均を上回ったり、50m走の全国平均との差が縮まっていたりと、運動面における個々の課題や目標達成を意識した取り組みの成果が見られた。		
生徒指導の状況 （学校いじめ防止基本方針）		（学校説明）第1回「悩み事調査」の結果では、いじめに関する悩みを抱えている児童生徒の4校平均は1.7%、いじめ以外の悩みを抱えている児童生徒の割合は9.6%であった。令和4年度（いじめに関する悩みを抱えている児童生徒1.55%、いじめ以外の悩みを抱えている児童生徒10.6%）と比較して、大きな変動は見られないが、年々把握が難しくなっているいじめをアンテナを高くしてみていくことが大切である。担任任せにせず、多くの目で児童生徒を見て、気になるあらわれについては情報交換をして早期発見や適切な対処を組織で行っていく。	いじめについては対応率100%、見逃し率0%であり生徒指導が十分機能している良好な状況であると言える。いじめの有無に関わらず、悩みを抱える児童生徒をOに近づけるためにも、「早期発見、すぐに対応」「チームで対応」「心を支える環境づくり」を心がけていただきたい。児童生徒自身が「見守られている安心感」をもって、学校でも家庭でも地域でも過ごせたら最高である。	対応率100%を前提とし、情報を共有し、チームとして対応していきたい。また、生徒指導に関わる問題を未然に防止するために、児童生徒が悩みを周りの大人に打ち明けられる人的環境をつくり、早期発見に努めていきたい。